

「道徳感情論（上・下）」

アダム・スミス(著) 水田洋(訳)

岩波書店 2003年2月14日刊

アダム・スミスを『国富論』の著者であり、経済学の父であると理解している人が多いかもしれないが、彼はここで紹介する『道徳感情論』や死後にまとめられた『法学講義』なども含めて近代社会科学全体の父だと考えるべきである。スミスは新大陸の独立運動やようやく始まったばかりの産業革命の息吹の中で、自由で平等な市民社会における個人が平和的に共存していく仕組みを学問的に確立した人なのである。

思想史家のエマ・ロスチャイルドは21世紀初頭の現状を18世紀末のスミスやコンドラセの時代と比較して「父親不在の世界」と呼んでいる。経済の自由化やグローバル化が急激に進行しつつあることは共通しているが、18世紀末には、スミスが『道徳感情論』で明らかにしているように、経済活動の前に道徳があり、市場メカニズムを信奉する前に市民が守るべき基本的倫理が存在しなければ、社会は長期的には機能せず、「不正義の横行は社会を崩壊する」といった議論がなされていた。しかし現在はそのような道徳や倫理に関する幅広い合意が形成されており、むしろ、スミス以前の中世の宗教戦争に舞い戻ったような様相を呈している。

『道徳感情論』はスミスが後に経済学や法学に発展させていく基礎となった著作であり、終生、改訂を重ねた作品である。ちなみに、『国富論』で有名になった「神の見えない手」という概念もこの『道徳感情論』ですでに使われている。

道徳哲学としては、同時代のカントの『道徳形而上学原論』では絶対的な正義が存在し、それを実行するかどうか問われているのに対して、スミスはプラトンやアリストテレスの倫理学に立ち返り、功利主義的立場をとりながら、道徳や正義は社会の中で相互的同意に基づいて形成されるものと捉えている。

スミスが『道徳感情論』や『国富論』で用いた中心的な考え方は、「社会の構成員は相互の援助を必要としているし、同様に相互の侵害にさらされている」が、「その援助は私的利益追求によってももたらされ得るが、正義を侵害することは強い道徳意識によって阻止されなければならない」ということである。スミスはこのような意識が「弱者を保護し、暴力をくじき、罪をこらしめることになるのである」と強調している。

アダム・スミスを自由経済の主張者と理解してきた人には、ぜひこの『道徳感情論』を読んでいただきたい。そして、経済の自由化、規制緩和が進む昨今、道徳的基盤の形成が急務であることを再認識していただきたい。